

村上隆著『北樺太石油コンセッション 1925-1944』

(北海道大学図書刊行会, 2004年)

服部倫卓

(社)ロシア東欧貿易会・ロシア東欧経済研究所調査役)

Takashi MURAKAMI, *Kita-Karafuto (Northern Sakhalin)*

Oil Concession 1925-1944

(Hokkaido University Press, 2004)

HATTORI, Michitaka

Japan Association for Trade with Russia and Central-Eastern Europe

1 本書について

北海道大学スラブ研究センターの村上隆教授が、2004年7月13日にお亡くなりになった。本書は、膀胱がんを告知された著者が最後の大仕事として取り組み、亡くなる1カ月前に奇跡的に発行に漕ぎ着けたものである。本書の完成に寄せた著者の情熱は語り草になっており、入院先の病室はさながら大学の研究室の様相を呈していたという。著者の研究者魂に敬服するとともに、それを献身的に支え出版をお膳立てした周囲の方々にも敬意を表したい。なお、村上教授はこの研究により、北海道大学から博士号を授与されている。

本書は、初期のソビエト政権による諸外国に対するコンセッション（利権）供与政策の一環として日本に提供された北樺太石油コンセッションを取り上げ、その誕生の経緯、操業を担った北樺太石油会社の経営実態、その解消の顛末を跡付けたものである。未公開の歴史史料を駆使した労作であり、とくにロシア国家経済文書館と日本外務省外交資料館所蔵の史料がその柱となっている。

日本とソ連／ロシアの経済関係、ロシア極東地域のエネルギー開発は、著者の一貫した研究テーマであった。ただ、その著書・論文一覧を見ても分かるように（『スラブ研究センターニュース』2004年秋号, No. 99）、著者はそれまで文書館の史料を用いた歴史研究を必ずしもしてこなかった。本書『北樺太石油コンセッション』の引用・参考文献一覧を見ても、著者自身の文献は一点しか挙げられていない。つまり、本書は著者が切り拓いた新たな境地であり、しかも全面的に書き下ろされたものなのである。病床にありながら、これだけの仕事を完遂する精神力は、まさに驚異的と言わざるをえない。

2 本書の内容

ここで改めて本書の全体像を示すならば、以下のとおりとなる。

- 第1章 1910年代末～20年代のコンセッション
 - 第2章 ソ連の石油部門におけるコンセッション
 - 第3章 1920年代半ばまでの北樺太における石油調査
 - 第4章 北樺太石油コンセッション獲得交渉
 - 第5章 日本の北樺太の石油への関心
 - 第6章 北樺太石油会社の事業展開
 - 第7章 1000平方ヴェルスタの試掘作業
 - 第8章 北樺太石油会社の雇用・労働問題
 - 第9章 トラスト・サハリンネフチによる石油開発
 - 第10章 トラスト・サハリンネフチによる石油供給
 - 第11章 ソ連当局による北樺太石油会社への圧迫
 - 第12章 北樺太石油コンセッションの終焉
- 資料

以上、章のタイトルだけからも読み取れるように、北樺太石油コンセッション自体にとどまらず、その背景や関連事項についてもかなりの紙幅を割いて論じている。この点については、やや評価が分かれるかもしれない。第1, 2, 3章が、本題であるところの北樺太コンセッションの位置付けについて、読者の理解を容易にしてくれていることは間違いない。ただ、ソ連のコンセッション政策一般については、シシキン (Shishkin, V. A.) らによる先行研究の蓄積もあり、それらに依拠する形で簡略に処理してもよかったのではないか。それよりはむしろ、これだけ価値の高いケーススタディなのだから、最後に本研究を総括する章をぜひとも設けてほしかった。

さて、本書が克明に跡付けているように、北樺太石油コンセッションの歴史は、直接的には、1920年のニコラエフスク (尼港) 事件を受け、日本軍が北樺太を保障占領したことに始まる。1925年の日ソ基本条約の締結により両国の国交が樹立され、日本軍は北樺太から撤退、事実上ニコラエフスク事件に対する補償としてソ連は日本側に北樺太における石油コンセッションを供与した。利権の期間は1970年までの45年間にわたるものであった。そこには、石油を確保したい日本海軍の強い意向が働いていた。実際に操業を担うことになったのは、1926年に設立された「北樺太石油会社」という日本側の民間企業であった。

北樺太石油会社の経営はすべり出しこそ順調で、原油生産量は3年目には年間10万tを突破、日本への搬出量も拡大していった。しかし、著者によれば、「コンセッション企業が異国の地で順調な発展を遂げたのは初期の数年間でしかなく、ほとんどの時期はソ連関係当局による圧迫の歴史であったといっても過言ではない」(本書「まえがき」より)。1930年代に入ると、日ソ関係の悪化を受け、ソ連当局の会社に対する締め付けが強化され、経営が悪化していく。結局、北樺太石油会社は、1941年の日ソ中立条約の秘密文書という扱いとなった松岡書簡によってソ連側から解消を求められ、第二次大戦中の1944年春に終焉を迎えたのである。ソ連当局は、北樺太の石油開発によりロシア極東域内の石油需要を満たすことを目論んでいたが、

もとよりコンセッション企業により資源が奪われている状況を問題視しており、ソ連独自の開発が可能となった時点でコンセッション企業を排除したというのが、著者の描く構図である。

3 本書の特徴と意義

何と言っても、本研究の最大の意義は、北樺太石油会社の経営にかかわるミクロ的なデータを網羅的に収集し、それらを余すところなく組上に上せ、徹底的に分析している点にある。本書全体に漂う、圧倒的な迫真性はどうかであろうか。著者自らが、最果ての石油採掘現場を訪ね歩くか、あるいは会社の帳簿を熱心に繰っているかのような、えもいわれぬ臨場感がある。

本書に限らず、著者の文章には、常に人間的なリアリティが溢れている。それはおそらく、著者がアカデミズム一筋ではない豊富な人生経験を経てきたことに関係していると思われる。とりわけ、評者が言うところの手前味噌になるが、ソ連（ロシア）東欧貿易会で研鑽を積んだことが活きているはずだ。本書の「あとがき」で自身が語っているように、著者は同会で最初、ソ連で開催される見本市の事務局の仕事をした。ロシア人労働者を、苦勞して労働に駆り立てた経験などもあるはずだ。その後著者は調査部（現ロシア東欧経済研究所）に移り、そこでソ連産業分析の独自のスタイルを確立する。1994年に活動の場を大学に移し、書く文章も学術的なものへと変わったけれど、本書に典型的に示されているように、かつて実業界で会得した産業・貿易に関する知識が著者の活躍を支えるバックボーンとなった。本書のテーマは著者が最も得意とするエネルギー産業であったが、著者はソ連の鉄鋼業や自動車産業の歴史についても同じくらの水準の研究をこなせたはずである。

このように、本書は北樺太石油会社の経営に関する研究としては遺漏のないものであり、決定版と言える。その一方、北樺太石油コンセッションをめぐるソ連当局の政策決定過程に関しては、必ずしも充分な論究がなされておらず、経営現場の状況証拠から政策を推測しているくらいがあるように感じた。

たとえば、本書において著者は随所で、1936年の日独防共協定を受けた日ソ関係の悪化が、ソ連当局による北樺太石油会社への圧迫につながっていったことを指摘している。しかし、その因果関係を直接裏付ける根拠は示されていない。むしろ、当時の国際情勢がコンセッションへの強烈な逆風になったであろうことは、容易に推察されることではある。スターリン体制の中核で本件に関する政策がいかに策定されたかを知りたいなどと望むのは、ないものねだりに近いのかもしれない。ただ、本研究においては、経営的な視点からの検証作業がきわめて精緻であるだけに、政策面においても解明されたこととそうでないことを厳密に区別するべきではなかったか。とくに、283頁において、「ソ連の圧迫方針を決定した文書」として、日本の環春領事から駐満州国大使宛ての文書が挙げられているくだりには、疑問を覚えた。

以上のように、ソ連側の政策決定については解明し尽くされたとは言えないものの、もとより本書の本領は現場の視点、ミクロの視点にこだわったアプローチにある。そして、著者自身も述べているように、ロシアがエネルギー開発への外資導入にいかなる方針で臨むかは、サハリン・プロジェクト等を抱える現代の日ロ関係にとっても喫緊の問題であり、いわば時代を超えたテーマである。その意味でも、本研究の価値は計り知れないものであり、その労を心よりねぎらいたい。

お わ り に

本書は著者が培ってきた素養が遺憾なく活かされた力作である。しかし、内容的には事例研究であり、必ずしも著者の研究活動を集大成するようなものではない。少なくとも、本人はこの研究をゴールとは位置付けていなかったはずだ。著者は常々、評者らロシア東欧経済研究所のスタッフに対し、研究所が所蔵する古い資料を捨てないでほしいと訴えていた。大学退官後は、がむしゃらに走り続けてきたそれまでの生き方を見直し、マイペースで昔の資料を読み返しながら、日ソ／日ロ経済関係の通史をまとめる仕事をしてみたい。そんな第二の人生を思い描いていたに違いない。

しかし、著者にはついで自由な時間は訪れなかった。何かに追われるように疾走し続けた人生を、最後まで全うしてしまった。故人の志の一部なりとも受け継いでいきたいものである。そうした思いから、まずは本書と格闘することこそ肝要と考え、浅学非才も省みず書評を試みた次第だ。